

# 1 飼料作物

## ①とうもろこし

### ア 肥培管理

梅雨時期の降雨量の多い時期、および湿害を受けたときは、窒素を中心に7 kg/10a程度、追肥を行う。

## ②牧草

### ア 肥培管理

1 番草収穫後、窒素成分を中心に7 kg/10a程度、追肥を行う。

### イ 2番草の収穫時期

地域の気候やその年の天候にも左右されるが、1番草収穫後、約1か月後を目安に2番草の収穫が始まる。

温暖地においては、3番草以降の収量、雑草混入割合にも影響するため、早刈り（出穂始め～出穂期）に努める。

## ③強害外来雑草の防除

表 主な外来雑草の除草剤による防除対策

※「強害外来雑草の防除について」岐阜県畜産研究所（平成22年3月）より

### 【飼料用トウモロコシ】

雑草名	土壌処理 農薬の種類（農薬名）	茎葉処理 農薬の種類（農薬名）
アメリカイヌホソギ イヌホソギ	ジメナミド・リニuron乳剤 アトラジン・メトラコロール水和剤	アトラジン・メトラコロール水和剤
アレチウリ		アトラジン・メトラコロール水和剤 ニコスルフロンの乳剤
イチビ シヨクヨウガヤツリ	ジメナミド・リニuron乳剤 （効果は十分でない）	ハロスルフロンのメチル水和剤
セイバンモロコシ（ジヨソソングラス）		ニコスルフロンの乳剤
ヒユ類	ジメナミド・リニuron乳剤 アトラジン・メトラコロール水和剤	ニコスルフロンの乳剤
マルバノコウ		アトラジン・メトラコロール水和剤 ベンタゾンの液剤
ヨウシュチョウセンアサガオ	アトラジン・メトラコロール水和剤	ベンタゾンの液剤

### 【牧草】

エゾノギシギシ		チフェスルフロンのメチル水和剤 MDBA 液剤 アシュラム液剤
ワルナスビ セイバンモロコシ（ジヨソソングラス）		グリホサートカリウム塩（ワルナスビでの効果は十分ではない）

強害外来雑草は、1980年代後半頃から畜産農家の飼料畑を中心に蔓延し始め、飼料作物の減収や品質低下といった被害をもたらしている。主な侵入経路は輸入飼料に混入した外来雑草の種子であり、餌と一緒に牛の口に入り、牛の体内で完全に死滅しないで糞として排泄される。その後、堆肥化しても発酵不十分な状態で堆肥が圃場に還元されると、種子が死滅せず出芽し繁茂することとなる。

強害外来雑草を繁茂させないためには、十分な堆肥化により雑草種子を死滅させる必要があり、雑草種子が死滅する温度、60℃以上の発酵熱でしっかりと種子を死滅させ

ることが必要である。

また、強害外来雑草の防除には雑草の発生を防ぐことが重要であるが、発生した際は除草剤による化学的防除が一般的である。

除草剤の使用に際し、農薬が飛散しないよう必要な措置を講ずるとともに、農薬の使用状況（年月日、場所、対象農作物、農薬名、使用量等）を記録しておく。

## 2 梅雨時期の家畜の飼養管理

季節予報では、6月、7月の気温は平年並みもしくは高い見込みであり、曇りや雨の日が多いとの予測である。

梅雨の季節は飼料や飲み水が変質しやすく、下痢や風邪などの病気が発生しやすくなるため、家畜の飼養管理にあたっては、以下の事項に注意する。

- 畜舎の窓の開閉を行い、換気に努める。
- 家畜のエサの保管に注意する。
- 畜舎の床は、乾燥させるよう努める。
- 常に、長靴および牛舎の消毒に努める。

### ①給水について

家畜は飼料中の水分や栄養代謝で生じた水分も利用するが、必要な水分のほとんどを飲水によって摂取する。そのため、家畜が水を飲みたくても飲むことができない状況に気付かずにいると、乳量の低下、発育不良、食欲の減退、病気の発生等につながる。夏を迎える前に以下のことを確認し、家畜が新鮮な水を十分に飲めるようにしておく。

- 頭数に見合う水飲み場があり、ゆっくりと十分に水を飲むことができるか。
- 給水器（ウオーターカップ等）や水槽が汚れていないか。  
（家畜の糞尿、鳥の糞、飼料残渣等が入っていないか。）
- 飲水制限によって十分な水が出ていないことはないか。
- 給水器の故障・詰まりにより、水が止まっていないか。

### ②畜舎のハエ対策

梅雨に入り、気温・湿度が高くなると畜舎にハエが多く発生してくる。

ハエは、不潔・不快感を伴い、さまざまな病原菌（ポリオウイルス、チフス菌や赤痢菌など）を媒介するため、伝染病の発生要因となり、大発生をさせると近隣住民にも多大な迷惑をかけることとなる。そのため、早い時期からハエ対策に取り組むことが必要である。

効果的なハエ対策として、以下の方法を紹介する。

#### ア 環境的な対策方法

ハエは一度発生すると、駆除が困難であるため発生をできるだけ抑える努力をする。

- 除ふん、清掃、残餌の除去をこまめに行い、畜舎内を清潔に保つ。
- 畜舎内の風通しを良くし、乾燥させる。
- ふんは発酵、乾燥させ、ウジを死滅させる。（発酵温度60℃以上とする）
- 週に1度は、発生源となる場所（尿溜め、排水溝、堆肥舎等）をチェックする。

#### イ 薬剤を使用した対策方法

ハエの発生するこの時期、薬剤の使用にあたっては、まず幼虫対策を行う。幼虫が発生しそうな場所に脱皮阻害剤（IGR剤）を定期的に散布する。ハエが目立ってきたら、IGR剤の散布頻度を増やし、毒餌法や残留噴霧法、塗布法を併せて実施する。

ハエの大発生等の緊急時には空間噴霧を実施する。また、薬剤耐性をもつ個体が発生するため、同一系統の成分が入った薬剤を連続して使用しないようする。

1) 脱皮阻害剤（IGR剤）

ウジの成長（脱皮）を阻害して、死滅させる薬剤。遅効性であるため、見た目の効き方が遅い。1～3日齢幼虫の前期までに散布しないと効果が薄い。

2) 毒餌法（ベイト法）

殺虫剤と蜂蜜や砂糖などを混合した餌を設置し、誘引殺虫する方法。発生源対策と同時に行うと効果的であるが、大量発生したばあいは対応が追い付かない。また、家畜やペットの口に入らないように注意が必要である。使用する薬剤は、カーバメイト剤、有機リン剤等。

3) 残留噴霧法、塗布法

天井や壁柱等のハエが休息し集まりそうな場所に薬剤を噴霧または塗布する。長期間残留し、効果も持続する。使用する薬剤は、カーバメイト剤、有機リン剤等。

4) 空中噴霧法

即効性のある薬剤を霧状にして、直接虫体に噴霧する。使用する薬剤は、ピレスロイド剤。